



シリーズ 子どもたちの発達

子どもの遊びと発達『3歳から6歳の認識発達過程の特徴と保育』

3歳から6歳の認識発達過程の特徴と保育 ①

幼児期は、学童期とは違う独自の発達過程をもつと言われています。その違いを、ハンガリーの発達心理学者ランシュブルグ・エネーは『学業を始めるのに適した年齢が世界的に6～7歳という就学時期になっているのは、ちょうどその頃にく思考の網目>ができあがるから』なのだと言われ、それを「明白体験」と説明しています。

この明白体験とは何かというと、平たいお皿にある水を細長いコップに移し変えても量としては変わらない、もし変わったとしたら何かのトリックだと思うという「ありえないこと」がわかっている1つの精神的システムのことです。

その精神的システム<思考の網目>が、7歳ごろからでき上がり、世界の理解と思考の安定の大黒柱になっていくというのです。逆に、そのシステムがなかなかでき上がらないと、世界は混沌として、思考や情緒の安定がしにくいとも言えるでしょう。(発達障害では、このことへの理解が重要な療育のカギにも なっています)

更に、エネーは「大人が子どもを理解することが難しいことの最大の原因は、この大人の中の明白体験にある」と言っています。

3歳から6歳の幼児期の認識過程は、まだ発達の的に不確かで、偶然で、不自由を伴い、大人や小学生以上の子どもとは質的に違ったふうに、この世界を知っていくのです。

私達の保育が専門性を問われるのは、こうしたその時期特有の、人間の発達過程を尊重し

た活動や関わりをしていくか、否かで、子どもの発達に少なからず影響をもたらすからと言えるでしょう。

現在の市販されている乳幼児向けの教材や、早期教育のプログラムだけを頼ってしまうことの危険性は、それらは子どもの部分的な発達を切り取って作られているものだからです。

つまり、全てが害になるということではなく、その子の発達に即した使用の仕方があるかないかで、その影響はかわっていくということにあります。「与えること」を教育的と考えるだけでなく、子どもがどのように経験することが良いのか？を考えるためにも、幼児期の様々な側面の発達特徴をシリーズの中で少し整理してみたいと思います。

<情緒主導の時期>

満3歳という年齢の前後になると、個人差はありつつも大人以上に記憶がはっきりしてきたり、突然、規範的な秩序に添うことを言い出したり、自分の経験を正確に話すことができるなど、考えることと表現の一致や判断の社会性などの育ちが著しくなります。

しかし、この時期の認識過程はまだまだ乳児期の「自分の感覚をとおした、快、不快」の認知にゆり戻ることが多いのです。

何となく眠い、お腹がすいた感じ、寂しい、などの生理的な欲求に従属した不機嫌も、しょっちゅう現れます。

「ずいぶん成長してきた」と、伸びている側面への喜びに意識が向いている大人は、このことを理解しません。もちろん悪気はありませんし、むしろ成長した姿を認めようと励ましたり、褒めたり、叱咤激励など、様々に「できること」を本人にさせることがその場の決着になると信じて関わります。

そのため、たいしたことではないはずなのに、葛藤が起きることが日常の中に増えてしまいます。「わかっているくせに、最近は何も聞かずに言う赤ちゃん返りがある。何の原因か？最近忙しくてかまっていないからか？」などと、大人の悩みや困惑は深くなることも多いでしょう。

でも、それがこの時期の子どもの認識過程の特徴です。知的な作業では理解していても、情緒の働きが大きく行為に影響しています。この時期の子どもは、その時々やる気や気分により行為の仕方に変動も大きく、更にその子の興味にもとづいたものと、そうでないことの

間で極端な差異を見せることもあるのです。「できること」を毎日同じようにできなければ、心配になってしまうのが大人ですが、子どもはしっかり発達の階段を上っているのです。葛藤が大きくなるようなら、「今日はやらないの？」と本人の意思を確認して、あとは子ども自身の判断に任せた行動を認めていくのがこの時期の上手な付き合いかたとも言えるでしょう。

反面、自分の「有能性」にも敏感な時期ですから、ちょっとした言葉で急にやる気を見せたりもしますね。

この「有能性を確認する時期」については次回にお話したいと思います。
いずれにしても、生意気にも見え、赤ちゃんにも見え、子どもらしい面をたくさん見せてくれるこの時期を、大人の理解の仕方が無用なイライラを子どもも大人も抱え込まないで、子どもの世界を共有していければと思います。

柏市駅前認証保育園 Kid's Encourage
園長 日下部樹江

